8. 冷戦の始まり を学ぶにあたって

1. 戦後史の課題について

戦後の歴史課題からは、「冷戦の始まり」と「冷戦の終結」を取り上げる。東京では、外国につながる生徒の出身はアジアが多い。今の世界の問題、そしてアジアの状況を理解するために必要な情報を伝えておきたいと考えた。

私は、授業で取り扱う地域を、白地図の世界地図上に色塗りをして、日本語で国名を記入するタスクを続けているが、よく生徒から「朝鮮はどっちを塗るの？」と質問が出る。「朝鮮半島が2つの国に分かれたのは20世紀のことだから、今は2つの国をまとめて1つの色で塗って」と毎度伝える。台湾が日本の植民地になった時点の学習では、「今は日本が植民地にした場所として台湾に色を塗って」と指示し、台湾をどう考えるかは戦後の学習まで保留にしている。もちろん中国の生徒からは直ちに「中国の国土の一部だ」という発言は出るが、その時点では取り上げない。この「保留」にした部分の結論は、戦後の学習できちんと伝えておきたい。

21世紀に生まれ、母国の歴史だけを学んでいたり、日本の中学校時代の歴史の学習が日本語のハンディのために空白になってしまった生徒たちは、ドイツやベトナムもかつては2つの国に分かれていたことやソ連という国があったことも知らない。ソ連については、ロシア革命で学習するが、その国がどうして今はないのか、説明の機会を失うと、ソ連が名前だけ変えてロシアになったと思ってしまう。

歴史総合の教科書の記述は、「冷戦終結後の世界」で終わるが、これから先の時代を生きる生徒たちにとって、未来の歴史はそうはいかないかもしれない。そのためにも、冷戦の構造は学んでおきたい。こうした理由で、冷戦の始まりと終わりを取り上げた。

2. 取り上げる項目の教科書の区切り

歴史総合の教科書は、従来の歴史教科書の区切り方と異っている。「大衆化」の単元に第一次世界大戦から冷戦体制までが含まれ、「グローバル化」の単元は、冷戦構造下の課題からスタートしている。たとえば、ベトナムに関して、インドシナ戦争までは「大衆化」で取り上げ、ベトナム戦争部分は、「グローバル化」に入る。

しかし、現実的に考えると、戦後部分の学習はかなり時間が制約されてくる。そこで、教科書の単元の区切りにこだわらず、ベトナムについては、「大衆化」の単元で学ぶ中国、朝鮮と一緒にまとめた。在日につながる生徒、中国残留邦人につながる生徒などを配慮して、ひとことずつ加えた。

一方、フィリピン、インド、ネパール、バングラデシュ、パキスタン、ミャンマー、タイ、マレーシア、シンガポールなどの出身の生徒たちから、「私の国のことは勉強しないの？」という声が聞こえてきそうである。あらかじめ、戦後の自分の国の自立の事情を簡単にまとめて、生徒本人から発表してもらおう時間を作るのがいいと思う。

3. 取り上げ方は中学校歴史教科書レベルで

歴史総合の教科書では、戦後部分が教科書の記述の3分の1を占めている。現代史

を学ぶことを主眼としているからである。計画通り、2学期のうちに「グローバル化」の単元に進んでいれば、丁寧に戦後史を学ぶことができる。しかし、限られた時間になった場合、残った単元は時間切れでやらずに終了となりがちである。

そこで、戦後部分は、中学校歴史の教科書レベルにとどめ、どの歴史教科書より取り上げる項目を減らした。概要さえつかめれば、自分の得意な言語で調べればいい。概要も知らなければ、問題意識の持ちようがない。今はない国の名前や組織の名前は極力削除した。「資料を読み取ろう」で取り上げたベトナム戦争部分は、単元としては「グローバル化」に含まれるが、「冷戦の始まり」の単元を含めて取り上げる。